

## 大学生アルバイトの現状と取り組み方について

秋本 有紀

秋本有紀さんは、3年時には、認知症と思われる同居家族といかに暮らしていくか、4年生になる段階では、手仕事を維持・発展させていくにはどうしたらよいかという問いをもっていました。一つ目の問いについては、認知症当時者の著書を読んだり行政サービスについて調べているうちに、実際に行政サービスの利用を始めることとなりました。そして進級論文では、担当のケアマネージャーと対話を行い、その結果、ケアのあり方や家族との関係の作り方について自分にとって納得できる答えを得ることができました。二つ目の問いについては、もともとモノづくりの趣味があり、自分自身の将来のキャリア選択という面からも、手仕事の将来について考えてみたいということで文献を読みました。けれども、趣味として日常的に楽しんでいることと、手仕事を産業として残すための方法を検討することとの間には距離があり、またキャリア選択も終えたことから、卒論では別のテーマに取り組むことになりました。

最終的に有紀さんが選んだのは、3年間続けていたアルバイトの課題と意義を振り返るということでした。アパレルの店舗で販売を担当してきたということで、有紀さんから初めて話を聞いた際には、商品の組み合わせについて考えたり接客で工夫したりと学ぶことが多い職場というイメージでした。ただ、その後卒論のテーマに決めた時点では、コロナ禍ということでアパレル企業の存続そのものが厳しくなっており、学生アルバイトに対しても、十分なサポートシステムがないまま、売り上げを期待する状況だということでした。

約2か月間、アルバイトで印象に残ったできごとと自分の考えをフィールドノートとして書き留め、それを分類・考察することで、有紀さんはアルバイトの問題と意義を具体的に描き出しました。そのうえで、大学生のキャリア形成に関する調査などの先行研究と、自分のフィールド調査の結果とを結びつけ、結論を得ていきました。すなわち、マニュアルがないことは非正規労働者にとって仕事の達成に困難を与えると同時に、裁量を生む余地を与え、そこからやりがいを感じることもできる、また、学生にとっては各種の学びや将来の職業選択にも肯定的な影響を与える、したがって自由な時間をもてる学生時代に、アルバイトに没頭することを勧めて、有紀さんは卒論を終えました。

こうして振り返ると、有紀さんの2年間のゼミ活動は、その時々有紀さんの悩みとともにあったと言えます。本ゼミの方針は、本当に自分にとって切実で解決したいことをテーマとすることであり、本人の問題がその時々で変わっていくことも多々あります。有紀さんの3回にわたるテーマ変更のプロセスは、今、自分が解決したいことは何かと自らに誠実に問い続けた結果だと思えます。有紀さんは未来の職場でも誠実に考え行動し続けると予想します。誠実すぎてもろもろの問題が出てくるようなことがあれば、卒論でのフィールド調査をまたやってみてください。書いてみるのが問題解決の出発点です。

## 洛中洛外から見る京都

今井 莉子

京都出身の今井莉子さんは、3年生の早い段階から、京都の人間に対する「怖い」というイメージの払しょくを目標に決めていました。大学入学後、京都以外の出身者と話す機会が増え、京都の人には裏がありそうで怖いという発言に何度か出会ったそうです。

ネガティブなイメージを変えるためには、たとえばマスメディア等でネガティブなイメージが流布されている現状を調べ、問題のある偏見が作られていることを問題化するという方法があります。ただこの方法だと、対抗するものとして想起されるのは「京都の人のポジティブなイメージ」や「本物の京都の人々の傾向」で、京都の人々が共通性をもつということが前提となります。そのような共通性は非常に単純化されており、ネガティブな意味づけは容易にポジティブなものに変わりえます。莉子さんが挙げていた、「いつもお子さん元気ですね」と言われたら「騒がしくてすみません」と謝らねばならないといった例は、発言に裏表があって怖いとも、穏やかな伝達方法だとも意味づけることができます。

こうしたことをゼミで莉子さんと話しながら、私からは「京都」とはどこを指すのか、それは一つのものとして語りえるのかと問うたように記憶しています。その後、莉子さんは京都府の丹後地方に住む祖母と対話を行ったのですが、祖母は鳥取出身で、福井で自営業を営んでいた祖父と出会ったのち、丹後に暮らすようになりました。対話の中で祖母は、丹後の人はAだけれど京都の人はBだ、福井の海辺の人はCだったが丹後や京都の人はDだ、丹後に住んで長いが自分たちはよそ者だなどと語りました。居住地を移動してきた人の複雑な境界意識を読み取ることができ、私にとってもとても興味深い語りでした。

莉子さんはこの対話の中で、自分自身が京都というものにマイナスな表現を使う場合があることに気が付き、京都の人間自身が京都をどのようにイメージしているのかに焦点を移すことにしました。具体的には「洛中・洛外」という地域区分についての京都市出身者の意識を、アンケート調査で調べてみました。多数の回答を集められたわけではなかったものの、9割を占める大学生の意識として、「洛中・洛外」という概念や地域区分の仕方についての認識は明確ではないものの、中には差別的であると問題視している人や、親から「洛外」は治安が悪いといった情報を得ていた人もいることがわかりました。莉子さんの同世代においても、京都市内の中に漠然とした区切りがあり、何らかのネガティブな意味合いがあるという意識をもっている人もいるということになります。

莉子さんはアンケートの質問ごとに回答をまとめるだけでなく、各回答者の他の回答との関係を追い、上に挙げた例以外にも多くの印象的な考察結果を得ました。莉子さんが指摘しているように、区分意識は世代によっても異なると予想されます。こうした意識がどのように形成されてきたのかを解明することができれば、ではこれからはどのようにすればよいかが見えてくるかもしれません。莉子さんには、データを緻密に分析しまとめ上げる力を活かし、今後もじっくりと未来をつくってほしいと思います。

## シンガポールの教育制度の在り方

上間 大世

上間大世さんは、幼児期を東南アジアで過ごし、また、教育系の仕事に就きたいということで、ゼミ所属当初から東南アジアの教育制度に興味をもっていました。大世さんが住んでいたのはシンガポールでしたが、その間またその後カンボジアやフィリピンを訪れる機会があり、それらの国々で子どもたちが学校に行っていない様子を見て驚いたということでした。

進級論文では、教育活動に興味をもち海外ボランティアの経験がある先輩と対話をしました。大世さんは対話から、開発途上国で教育を普及させることの意義を見出したかったようですが、対話相手は、教育を受けることとよい職業に就けることが結びついていないと教育を受ける意義が見出せないのではないかといった話をしています。

子どもたちが一定の教育を受け、全員が基礎学力以上の力を身に付けることは、当該地域の社会経済状況を向上させるだろうと予想されます。他方で、社会経済状況があまりにも悪いと、制度としての教育の普及もできず、家族も含めた当事者にとっての意義も感じられない。対話相手の発言は、教育の普及と貧困問題改善とが、卵が先か鶏が先かという難しい関係にあることを表していると思います。

進級論文の後、大世さんは、シンガポールの発展の背景にすぐれた教育制度があると仮定し、卒論では文献をもちいてそれを証明しようとしていました。義務教育課程から高等教育までの道筋を詳細に説明するとともに、第1言語としての英語習得が進路選択の重要な要になっていることにも言及しています。シンガポールでは、小学校から中学校に進む段階で学力別にコースに振り分けられ、その後さらに何段階もの試験を経て、選り抜きの高い学力をもつものだけが大学に進学できます。この試験による選抜の仕組みは実力主義と言える一方、富裕層であることや家庭での使用言語が英語であることが、より高いレベルの学校への進学を可能にしているというデータもあるとのことで、社会階層が「実力」と関係している可能性をうかがわせます。また実力主義であることは、海外からの積極的な人材獲得政策にもつながっており、自国民と外国人との間に競争関係を生んでいるようです。

大世さんは当初、シンガポールの教育制度は国の繁栄をもたらしており、他の東南アジアも採用すべきだという結論を考えていました。しかしゼミでの議論の影響もあってか、最終的には、大学教育を受けられる機会が万人に与えられておらず、問題のある制度だとまとめました。この変更は、結論の内容が変わったというよりも、どの立場から制度を見るか視点が変わった結果と言えるでしょう。つまり、シンガポール一国の社会経済状況の発展・維持の視点から見た場合、少なくともこれまではその教育制度は成功してきた。けれどもそこに住む一人ひとり、特に、裕福ではなく英語以外を第1言語とする人にとっては、苛烈な競争にさらされるうえ、人生のかなり早い段階で特定の職に就く未来しか描けなくなるかもしれない、非常に厳しい制度と言えます。教育職に就く大世さんには、誰の立場から見るべきなのかを、考え続けていってほしいと思います。

## コロナ後の航空業界の復活を目指して

大崎 みなみ

大崎みなみさんは、航空業界で働くことをめざしており、3年生のときからこのテーマで考えてきました。進級論文では航空業界で就職することに決まった友人と対話し、動機や将来像、就活準備の仕方などが、自分とはかなり異なるということを知り少し驚いたようでした。中でも、対話相手が、航空業界で働けば他の業界よりも得られるものが多く、次の仕事につながると話したことは、みなみさんに、自分は長く航空業界で働きたいのだという思いを粗目手確認させることになりました。そこで、いったんは長く働ける労働環境を卒論のテーマにしようとしたものの、多くの航空会社はコロナ禍の影響を強く受け、新規採用そのものを中止するという状況となりました。卒論準備を本格的に開始した2021年の春になっても状況は好転せず、みなみさんは、就労者の労働環境も大切だが、それ以上に航空業界そのものの存続の可能性を展望する必要があると考えるようになりました。

そこで、コロナ禍の影響にも言及しつつ、地球上の移動の歴史をまとめた文献を読み、卒論ではまずそれをまとめなおすことから始めました。人の移動が容易になればなるほど、感染症も国境を越え急速に広がりうることは、今回のコロナ禍前から起こっていたことでした。感染症拡大を防ぐためには人の移動を制限せざるをえず、航空業界は大きな打撃を受けます。そこから本当に立ち直ることが可能なのか。みなみさんは業界専門雑誌のコロナ禍前2019年度と後2020年度の記述を比較しました。2019年度には、翌年の東京オリンピックに向け、新機種の導入、新航路の開始と新規事業に積極的だった大手航空会社が、2020年度には一転し、それらを取りやめるとともに、貨物運搬や従業員の出向といった戦略で乗り切ろうとしてきたことが読み取れました。

今回の卒論の目標は、コロナ禍後の航空業界の未来を展望することでした。みなみさんは、コロナ禍以前に完全に戻ることはないだろうが、国境を越えたモノの動きは止まらず、それに伴ってある程度のヒトの移動も避けられないはずだ、よってこれまでの航空会社の取り組みも活かせるのではないかと結論づけました。2021年度中にはコロナ後と言えるような状況が生まれると予想し、そこから以前とは異なる形での未来を考えようとしていました。卒論提出時点の2021年12月半ばにはその未来が間近に来ているように思えました。しかし1か月半後の2022年1月末現在の時点で、再度感染が広がり終息には至っていません。こうした予想外の事態に、国も企業も個人も対応が迫られつづけていますが、その対応の基本になるのは、冷静にデータを集め収集し、その分析から現状を知ることだと思います。

やがて、以前とまったく同じではないけれども近い形に、世界はだんだんと戻っていくでしょう。ただ、他者に会うことが誰かを命の危険にさらしてしまうかもしれない、その恐れは強く長く記憶に残るように思います。感情の記憶を新たなものにしていくために、みなみさんには卒論で実践した方法を活用して行ってほしいと望んでいます。

## ネガティブな自思考からより良い方向へ思考を変えていくには 上江 帆乃果

上江帆乃果さんは、お笑いが好きで自分で人を笑わせることも好きだということで、初めてのころは、笑いのあるコミュニケーションの仕方、日本と北米のお笑いの比較といったテーマを考えていました。漫才や「笑い」の表現は、私が一時期興味をもって「文体論」でもよく取り上げられていたテーマで、それなら少しは助言できるかなと思いました。

けれども進級論文のテーマを絞り込んでいく中で、帆乃果さんは、「笑い」の仕組みを知りたいというより、自分が人を笑顔にするようなコミュニケーションをとるにはどうすればよいかに関心があるということで、その見本になるような友人と対話をすることになりました。友人は自分の失敗をネタとして、客観的かつ積極的にとらえていました。帆乃果さんは、人を笑わせようとしてうまくいかないで悩んでしまうということでしたが、友人の話聞き、ポジティブな考え方をもちることが基本だと感じたようでした。

そこで卒業論文では、失敗時に自分を責めたり、完璧を求めて先延ばしにするという性質を克服すべく、心理学の文献を読んでまとめることにしました。私自身も専門でないことから帆乃果さんとも相談し、いきなり論文を読むのではなく本を読んでみることにしました。具体的には「マインドセット」「進化心理学」に関する著書を読みながらまとめ、4年生の夏休みごろには「サイコパス」についての数冊を追加することになりました。キーワードだけ見ると私にはなじみがなく、サイコパスに至っては刑事ドラマや凶悪犯罪者しか思い浮かびません。しかし実際の文献を見てみると、文献リストも充実しており、心理学者が研究の成果をかみ砕いて、一般読者向けに紹介したものという印象を受けました。

帆乃果さんは、研究書と一般書の間位置するような文献の要点をうまくまとめ、間に進級論文で行った対話の結果も挟み込みながら、ストーリーのある卒論に仕上げていきました。失敗すればするほどよいという心の持ち方や、何も考えないですぐ行動に移すというサイコパス的性向の利用といった提案は、帆乃果さんと同じように自責思考に悩む人にとって力になると思います。

今回の卒論執筆者の中で、自分の心理・精神にかかわるテーマを選んだ学生は、帆乃果さんを含め4名いました。自分にとって切実に解決したい問いに取り組む、その問いに自分で納得できる答えが出せたなら、結果として他の読者にも意義のある研究論文になるというのが当ゼミのスタンスです。自分の性格などに悩みをもつ学生は、これまでも心理学分野のテーマを選んできましたが、今年は突出して多かったです。テーマを選ぶ時期と行動制限（自粛）の時期とが重なり、自分自身の内側に目が向きやすかったのではないかと推測しています。読書を厭わず物語構成力のある帆乃果さんの未来には、夢中になって取り組める多くの物事が待ち構えています。それらに取り組むうちに、自分の性格がどのようなものであるかは気にならなくなるのかもしれませんが。

## 大学生がボランティア活動をすることの意義

砂川 日奈子

砂川日奈子さんは、2年の間に三つのテーマについて考えてきました。一つ目は初めてテーマ探しをする段階で、言語と人の性格の関係についてでした。私からは、これを証明することで日奈子さんのどのような問題が解決するのかと尋ねたと思います。また、喜怒哀楽をとまなうようなテーマがいいという話もしました。強い動機や問題意識がないと、一般論を確認するだけで終わりやすく、独自の研究にはなりにくいからです。

このテーマは違うと感じた日奈子さんは、これまで心から楽しんできた旅行へとテーマを変えました。そして進級論文では、友人との対話もふまえ、非日常性を感じる海外旅行の魅力についてまとめました。4年生になってからもしばらくは移動や旅に関する文献を読んでいたところ、秋学期が始まるころ、ボランティア活動について書きたいということで、新しいテーマに取り組むことになりました。ボランティアには2年生から参加していたのですが、4年生の夏休みには、ボランティア主催団体が始めることになったカフェの改装にかかわるなど、今まで以上にかかわりが深くなったということでした。

卒論執筆にかけられた時間はほかのゼミ生より短くなりましたが、日奈子さんには、ボランティアによって人と関わることが好きだと自覚し、そのことが将来の職業選択にもつながったという確信がありました。ほかの大学生にボランティアの意義を伝えたいという明確な目的意識があり、日奈子さんと同じ団体で活動する大学生2名にインタビューを行うことに決めました。ここでのインタビュー対象の選び方が、日奈子さんの卒論の決め手だったと思います。一人は、おそらく自分と近い考えをもっていそうな人、もう一人は何をを考えてボランティアに参加しているのかよくわからない人。両者とじっくり話してみると、似ていると予想していた人が自分とは違う思いをもって一方、よく考えがわからないと感じていた人が自分と似ている部分もあったということで、発見のあるインタビューになりました。結果、日奈子さんも含め三者三様のボランティアへの期待や経験、そこで得たものをもっていました。一方、他者のためというより自分のために参加し始め、実際に自分にとって得たものが多く、そのことが活動の継続や他者支援への意欲につながるという共通の流れを見つけることができました。

日奈子さんが参加するボランティアの主な目的は日本語を教えることでしたが、ボランティア学生と学び手が日常的に食事にでかけたり、カフェ運営の準備をしたりと、活動から派生するもの全体をみなが楽しんでいる様子が伝わってきました。私自身は、日本語学習は権利であり、政策として機会を確実に用意すべきだと考えています。ただそのうえで、学生が中心となり、学び手とともにゆるやかに作り上げていく、そうした場の重要性を今回の日奈子さんの卒論から知ることができました。特にこの2年間、大学がそのような場たりえなかったことを心苦しく思いつつも、日奈子さんには、自分で見つけ作り上げていった居場所と、これからもつながってほしいと願っています。

## 女性の体型に関するメディアが与える影響

野口 智世

野口智世さんは3年生のころから健康法に関心をもっていました。智世さんは、季節の変わり目ごとに体調不良が起こるという体質をもち、また2020年春の緊急事態宣言後にダイエットを試みたことから、さまざまな健康法やダイエット法を調べてみたそうです。特にダイエットに関しては、不必要なほど痩せることが強調されていることに違和感をもちつつも、周囲の直接の友人やInstagram, You-tubeなどのソーシャルメディアの影響で、自分も痩せるべきだと思ってしまうということに気が付きました。一体なぜ痩せようとしてしまうのかを改めて考えてみるべく、進級論文ではダイエットに取り組む友人と話し、日本では周囲の目を気にしてしまうから痩せようとする、痩せていないといじめられるといった状況がテレビドラマなどで繰り返し流されているという結論を出した。

目にしたメディアの情報によって、痩せているほうがよいという価値観を無意識のうちに内面化しているのかもしれない、しかしそれは本当なのだろうか。こうした問題意識に至り、さらにそれが本当だとすればコロナ禍の前後でも同じなのかというもう一つの問いも浮かんできたことから、卒論では、同世代を読者に想定した『an・an』を対象に、2019年・2020年の体作りに関する特集の記述内容の異同を比べてみることにしました。

『an・an』は週刊誌で、ほぼ月1回のペースで体作りに関する特集を組んでいます。それらの特集記事を智世さんはすべて読み、2019年・2020年ともに概要をまとめた上で、2020年の記事でコロナ禍の影響がある部分を抽出していきました。その結果の詳細は、智世さんの卒論を読んでほしいのですが、2020年の記事には、自粛生活やリモートワーク、「おこもり」といったことばがあり、それらと結びつけて特集の提案内容を意義づける記述が散見されたとのことです。一方で、特集のメインテーマ自体はほぼ変わっておらず、コロナ禍の下にあることを感じさせないものも多かったようです。さらに分析対象となった記事で、「コロナ」ということばがまったく使われていなかったことは、私にとっても予想外でした。智世さんが考察しているように、本来は活動的な世代の読者をターゲットにしていることが、コロナ禍であることを全面的には意識させることのない誌面づくりに関係しているのかもしれない。

智世さんの卒論を読むと、最近の『an・an』は内面的な健康づくりと男性を意識した外面的な体づくりとの両方を扱ってきているようです。別の時代の『an・an』と比べてみるのも面白そうです。ただ、分析対象として勧めた立場で非常に申し訳ないのですが、智世さんと一緒に調べてみればみるほど、『an・an』のような雑誌を若年女性に影響を与えるマスメディアとして分析することの正当性に疑いも出てきました。表紙の大半がジャニーズ事務所のアイドルだということもどのように考えたらよいでしょうか。

ある問いをもって記事や写真を詳細に読み解いていくと、一定の傾向や比較対象との違いが見えてきます。そしてそれらのデータに基づいて、大きな結論を導き出すことができます。智世さんは、この一連の経験をきっと将来にも活用してくれることでしょう。

幸せな気持ちになるためには

八田 理菜

八田理菜さんは3年生の進級論文までは、人の性格を形成する要因に興味をもっていました。そしてその一因として家庭環境（親の子育ての方針）があると仮定し、母親と対話を行いました。理菜さんは、同じ家庭で育ったにもかかわらず、なぜ妹と自分の性格が違うのか、また、母親が主に自分を育てたはずなのに父親の性格に似ていると言われるのはなぜなのか、という問いをもっていました。対話の結果からは、理菜さんのお母さんが、子どもに口うるさくせず穏やかに育てるという一貫した方針をもって子育てに臨んでいたことがうかがえます。進級論文で、家庭環境と子どもの子育て方針には何らかの関係がありそうだという見通しを得た理菜さんですが、そのことを実証すればするほど、それでは成人以降に自分の性格を変えることは難しいという結論が出てきそうです。理菜さんは今の自分に大きな不満があるわけではないけれど、将来に向かってよりよくしていきたいという思いをもっており、卒論では、「幸福感」「ポジティブ感情」へとテーマを変えました。

理菜さんが卒論で文献から述べているように、この2年は特殊な期間で、大学生にとって通常とは異なるストレスがかかってきたと考えられます。文献では大きくは三つのストレスがあったとされていますが、理菜さん自身も同じように感じてきたとのことでした。それを克服するために理菜さんは「ポジティブ感情」を取り上げ、その定義、ポジティブ感情をもつことの効果、もつための条件と実践できる習慣という流れで卒論をまとめていきました。最終的には文献の内容を端的にまとめ、誰にでも読みやすく実践をうながす論考になったと思います。

今回のように私自身の専門と離れた分野で卒論を書こうとする場合、学生の問題意識がどのような研究分野のどのような領域と関連があるのか、見極めることが非常に困難です。どのような問題意識なのかをゼミで話し合いながら、関連がありそうな文献を探し、さらに問題意識を明確化した上でなければ、分野や領域を決めることができません。学生にまずは自分で興味がありそうな本を探してみたいと伝え、目の前の問題解決に役に立ちそうな、マニュアルのような本を選びやすいです。理菜さんの場合も、最初はコロナ禍の影響で感じているストレスに直接の問題を感じており、ストレスから離れるための方法というような一般書を選んでいました。

一般のマニュアル本は大勢を購買層として見込んでおり、多くの人に当てはまりそうな実践方法を載せています。それが本当にみなに効果があるなら、誰もストレスなど感じないで済むはずですが、実際はそうではありません。理菜さんは卒論で、心理学系の書籍と論文を読みまとめました。このプロセスで、一つの概念を定義すること、またその効果を証明することの難しさを理解したのではないのでしょうか。卒論で取り上げられた文献の中には、調査対象の偏りなど少し実証性に疑問を浮かばせるものもありました。今後は学術研究の成果を批判的に見ていくことにも挑戦してもらえたらと思います。

## 笑いが心身にもたらす影響

濱口 由芽

濱口由芽さんは、一貫して笑うことの効果について考えてきました。由芽さん自身は自分の笑い方が豪快すぎることをコンプレックスに感じてきましたが、由芽さんの笑いから元気をもたらえるという周囲の評価もあり、それは本当なのかを進級論文・卒論を通じてのテーマに据えました。

進級論文で行った由芽さんのお母さんとの対話は、卒論においてイントロダクションの一部に組み込まれています。そこでは二人のやりとりが口調や表情が見える形で再現されており、笑いについて語り合う由芽さんとお母さんが、その中でも頻繁に笑い合っているとわかります。お母さんが話した愚痴めいたことに対し、由芽さんが「ガハハハ！」と応じ、お母さんが「今はっきり分かったは！ あんたのその屈託のない笑い声がだいぶ家庭を支えてるんやなって」とコメントしている箇所は、由芽さんの存在、そしてその笑い顔や声が家族の親密感を高める不可欠な要素となっていることを、発言の内容だけでなくまさにそのことが起きている現場の事例としても伝えています。

卒論の本文では、まず一般書から、笑いの効能ととらえられるものを紹介し、次に精神神経科学分野の著書に基づき笑いを分類しました。そのうえで実証研究論文を複数用いて、笑いが笑う本人にもたらす、ストレス軽減と健康増進の効果をまとめました。取り上げられた各論文の内容は大変興味深いもので、たとえば落語や漫才を見た前後で、ストレスや健康に関する特定の物質が身体内でいかに増減するかを測定し、笑いに効果ありということを示したものが多くありました。そのほかに私にとってもっとも印象的だったのは、笑わせるようなコンテンツを見るわけでもなく、単に笑い顔を作るという動作だけでストレスが軽減し、さらに「いい笑顔」を作れたと思えば思えるほど、リラックス効果があるという内容の論文でした。面白い・楽しいという感情を伴った笑いでなくとも、表情を作ることそのものがストレスを減らしリラックスさせるのだとしたら、とにかく嫌な気分の際は笑顔を作ってみればよいということになります。私のゼミでは本人にとって切実なテーマに取り組むことにしており、結果的に精神状態にかかわる数々の療法を知ることになりました。その中でも笑顔を作るというのはもっとも容易にできる方法で、海外で書かれたものを含めほかにも実証的な研究があるなら紹介してもらえると、さらに卒論が充実したかとは思いますが。

結論で由芽さんは、卒論では笑った直前・直後を比較しその効果を証明した研究を紹介したが、コロナ禍の影響で長期的で大きな悩みをもっている人のストレスまでを解消できるかは不明だとしています。ゼミに参加した当初から現在まで、ずっと新型コロナ感染拡大の影響を受けてきたのが今回の卒業生です。長期間ストレスにさらされ、笑う機会も減っている人にこそ、この論文を読んでほしいという由芽さんの強い動機が、ほぼ二次資料（他者が研究し結果をまとめた論考）のみでまとめた卒論に説得性を与えました。実験系の論文を読み解きかみ砕いて説明する力は、きっとまたどこかで役に立つのではと思います。

## 適応障害との向き合い方～当事者がやるべきこと・周囲に求めること～

平戸 まりの

平戸まりのさんもテーマを大きく変えた一人です。4年生の春学期までは、方言につきまとうネガティブ・イメージの克服を目標にしていました。長崎出身ということで、「関西弁」に対して肯定・否定両面の印象をもつと同時に、九州の他県出身者に「長崎弁」をからかわれた経験があったことから、人々が方言を肯定的にとらえられるようになるにはという問いを立てました。莉子さんへのコメントでも書いたように、特定の方言に対するネガティブ・イメージをいったんポジティブ・イメージに変えたとしても、「関西弁」「長崎弁」をひとまとめにとらえている限り、そのイメージは容易に反転しえます。そのことを議論したのち、アイデンティフィケーションのための方言使用に関する文献を読みはじめました。人々が方言のイメージを活かしている様子を描き出し、選択的に利用可能なものとして方言を位置づけなおしたらどうか、というのが私の助言だったと思います。

まりのさんは熱心に取り組んでいたのですが、分析対象となる具体的なデータが見つからないなど、このテーマで進めていくことにじっくりいていない様子もうかがえました。そして、夏休みが終わってから、自分が患っている適応障害について調べてみたい、当事者と周囲にとって意味のある卒論にしたいということで、改めて問題意識から書いてみることになりました。まりのさんの今もっとも切実な課題として、自分の障害を周りに知ってもらった上で、自分もそれと折り合いをつけていきたいという強い希望が感じられるテーマ変更でした。

適応障害は私のまったくの専門外でしたが、まりのさんと相談しながら、医学的な定義や治療法をおさえた上で、当事者の視点から実情を述べ、周囲に対して提案していくという流れを考えました。

適応障害ということばが一般に周知されるようになったのは、現皇后の病名として公表されたころだったように思います。まりのさんはこれまで刊行された論文で「適応障害」をタイトル・キーワードに含むすべての論文をカウントし、確かに現皇后が公表した2004年に突出して論文数が多いこと、けれども公表時期や媒体を子細に見ると、公表時期以前に、精神医学の雑誌で適応障害の特集が組まれたことが直接の原因であることを突きとめました。この例が示すように、まりのさんは、可能な限りの文献収集を行い、それらを丁寧に読み解いたのちに自身の考察を加えていきました。自分自身が診断された適応障害というものを十分に理解したい、友人や家族、読者にも理解してほしいという強い動機が、豊かで一貫性のある卒論につながったのだと思います。「適応障害」を含む論文を一覧化した巻末資料も圧巻です。

オンライン授業も多かった2年間でしたが、まりのさんと授業後に少し話したりメールでやりとりできたことは大変励みになりました。ゼミ活動と卒論執筆過程で見せたパワー、これからもきっと活かせると思います。

## 「海外で生活するために日本語教師を選択することは正しいのか」

宮前 敦

宮前敦さんは、海外で生活したいという夢をもち、この2年間、実現方法を考えてきました。当初、敦さんは日本語教師になれば海外で生活できるのではないかと考えていたのですが、日本語教師養成講座の授業料の高さや日本語教師の待遇の悪さといった情報に接し、いったんはあきらめました。そして進級論文では、海外生活をテーマに、海外から日本へ移住した友人と対話しました。対話の結果からは、一概に海外生活といっても、家族の都合などで幼少期に移住するのと、自分の意志で青年期に移住するのとでは、そもそも背景が違うこと、対話の相手は、新たな環境に適應できるよう子どもながらも自分なりの心構えをもととしてきたことがわかりました。個人の背景とともに、海外で生きていくための困難や乗り越え方を明らかにしており、有意義な結果になったと思います。

敦さんは、自ら望んで海外生活をしてみたいと考えており、対話相手とは状況が異なります。卒業論文では、それを叶えるための職業として、もう一度日本語教師という職業について取り上げることにしました。近年、日本語教育の世界では「日本語教育の推進に関する法律」が施行され、公認日本語教師という新たな国家資格の創設が検討されるなど、教師の待遇向上を期待させる動きがあります。けれども、敦さんが紹介した文化庁の調査によると、コロナ禍前までの現状において、日本国内の日本語教師の待遇は平均的な労働者の待遇並みかそれ以下です。では敦さんが働くことを希望する海外での状況はというと、全世界規模の調査はこれまで行われておらず、各地域・各国によって大きな違いがあるものと推測されます。敦さんはベトナムなどで日本語教師経験があるAさんへのインタビューと、メキシコのインターナショナル・スクールでのフィールドワークを通じ、現状を理解しようとしてきました。Aさんへのインタビューからは、ベトナムでの日本語教師の待遇が急速によくなってきていること、豊かな社会人経験や人脈がベトナムでの事業を支えていることが読み取れます。またAさんは日本語教師でありながら、技能実習生などの人材派遣業も営んでおり、ベトナムからの労働者受け入れと日本語教育産業とが密接につながっていることも示されています。メキシコでのフィールドワークでは、ボランティア活動を通じさまざまな日本語教師と出会い、教師になった経緯や仕事の実際をつぶさに観察してきました。これらの事例からは、外国人受入政策や日本人の子どもたちへの教育政策といった日本の政策が、日本語教師の待遇を大きく左右してきたことがうかがえます。

4年生になって、海外に行きたいという希望を聞いた際には、コロナ禍で実現は大変難しいだろうと思っていました。私が知人に可能性を尋ねてみると、コロナ禍だからこそ日本人ボランティアが海外で待たれている状況だということで、敦さんも最終的に自分で受け入れ先を探し出すことができました。敦さんは、自分がやりたいこと、書きたいことを、淡々と着実に実現していき、その中で私にも発見が多くありました。日本語教育関係者として、世界のどこかで再会できる日を楽しみにしています。

## カフェの機能や雰囲気による分類と比較

森田 将伍

森田将伍さんはゼミでテーマを考え始めた当初こそ、「正しい日本語」とは何かといった問いをかかけていましたが、すぐにファッション（中でも古着）へのこだわりでテーマを変え、進級論文ではこのテーマで友人に話を聞きました。さらにその後は、普段から自分自身がよく利用しているカフェについて調べてみたいということで、卒論ではいくつかの店舗に足を運んだ結果をまとめました。

将伍さんにとって、その時々でテーマで文章を書いていくことに苦労はなかったように見受けられました。ファッション・古着というテーマについては、自分自身が普段から気を配り収集もしていることから、同じくこだわりがあるように見えるアルバイト先の先輩に話を聞きました。その先輩が自分なりの装いを貫こうとしているのに対し、自分は流行に敏感でそこに歩調を合わせるという傾向があるようだと気が付きます。ファッションは社会学や哲学でも議論されてきた分野で、私は卒論でも続けていけるテーマだと考えていました。古着というものにまつわる表象の歴史的变化を追ってみると、同時代の人々の「エコ」意識や、古着着用のもつ他者へのメッセージなどが見えてくるだろうと考えていたからです。

けれども将伍さん自身は就職活動を経て、これから卒論として何を特に考えていきたいのかがあいまいになり、もう一度問題意識に戻って考えなおすことになりました。古着について書いていた時にも少し話していたことですが、将伍さんには、古着屋とカフェを一体化したような店をいつか自分でもちたいという夢があり、それに関連して普段からよく行っているカフェの特色を考察してみたらどうかということで、卒論の新しいテーマを決めました。

卒論では、大規模・小規模チェーン店を合わせて5つ取り上げ、設立の経緯等の概要とともに、自分でフィールド調査を行った結果をまとめました。将来の店舗づくりに役立つようにということで、客層・滞在時間・価格帯・環境（内装・音楽・家具）・商品特徴・立地などの観点で、それぞれの店舗を観察しています。対象の店舗は将伍さんが普段から利用しており、その時の印象も交えての記述となっています。各店舗でのフィールド調査を複数回にわたって実施することができれば、客層・滞在時間などの考察を質量とも増やせたとは思いますが、コロナ禍で難しかったかもしれません。

この卒論を書いている最中も、将伍さんはカフェの経営を具体化すべく、将来の共同経営者候補と相談し、店の立地・コンセプトなどの構想を進めていたようです。就職活動のプロセスでもそうでしたが、将伍さんは自分がやるべきこととやりたいこととの関係を十分に考えた上で目標を定め、その目標に向かって着実に計画し実行できる力をもっていると思います。カフェの経営もきっと実現するのではないのでしょうか。そのための準備として、マーケティングの手法を一から学ぶことも必要かもしれません。仕事などから実地で学んでいくことも多いと思いますが、既存の知の体系も捨てたものではありませんので、今後は大いに利用してみたいと思います。

## 化粧品の選び方

山本 麻衣

山本麻衣さんは進級論文と卒業論文でまったく異なるテーマに取り組みました。進級論文時点では、自分が特定の年齢・性別の人に特に距離を感じているとのことで、他者との距離を縮めるためのコミュニケーションの取り方に興味をもっていました。そして、コミュニケーションが非常に得意に思える友人と対話し、普段から気を付けていることを聞き出しました。この対話の中で、麻衣さんは、対話相手の友人に自分の悩みを相談するようかのように語りかけ、友人から率直な回答を得るとともに、自分の場合はそういうことがこういう理由でできないとさらにコメントを返すことで、別の観点からの詳細な答えをもらうということに成功しています。

こうした進級論文の執筆でこの問題は解決したため、卒論では、安全な化粧品の選び方というまったく違うテーマに変更しました。

化粧品の成分については、「化粧品成分検定」という検定試験があるほど多種類にのぼり、麻衣さんが卒論で指摘したように、実際には同一成分であっても製品によって表示方法が変わるなど理解が難しいようです。こうした難しさがある中で、麻衣さんは今回、ウェブ上の評価サイトとオンライン販売サイトで上位10位までの化粧水を対象に、ひとつひとつ成分を調べ、毒性を評価することを試みました。麻衣さんは化学を専攻しているわけではなく、指導教員の私にとってもまったく未知の領域であることから、既存の文献を参考に可能な範囲で評価することになりました。そうした限界から商品名、製造・販売企業名は匿名としましたが、肌に問題を抱える人にとって具体的な化粧品選択の指針となるよう、麻衣さんは誠実にひとつひとつ成分を判断していきました。

その結果は、この化粧品、この会社であれば大丈夫と一口に言えるものではなく、麻衣さんは商品名等を匿名にしたこともあって、他の読者にとって役立つ結果にならなかったのではという思いももったようです。とはいえ、含まれている毒性成分の種類の数と、価格および製造・販売企業の背景とは関係がなさそうだ、ということはわかりました。価格が高ければ高いほど、また販売・製造会社の化粧品会社としての歴史が長いほど、その化粧品が安全だとは言えないようです。また、麻衣さんが調べたのは「化粧品」でしたが、「薬用化粧品」は医薬部外品で、通常の化粧品と違って全成分表示の義務がないといったことは、この分野について疎い私だけでなく、ほかの読者にとっても有用な情報だと思います。成分ごとの毒性評価を一覧にした巻末資料も力作です。

こうして2年間の取り組みを振り返ってみると、麻衣さんは自分のごく身近な生活環境の中にあり、かつ他の人も疑問を感じるような事象を見つけ、そこに実践的な解決方法で答えることが得意だとわかります。ゼミ内でもゼミ生同士をさりげなくつなげてくれたようにも思います。麻衣さんは、この周囲に働きかけていく力を将来にわたって活かしてくれることでしょう。

## 中国の男権社会が男性にもたらす不利益—家庭と職場から見る—

楊 子怡

楊子怡さんとは、日本語クラスの担当者として1年生からかわりがあり、そのころ楊さんの関心事は性的少数者に対する差別にありました。卒論ゼミに参加するようになったときには、女性・男性の呼称が、無意識に差別的な考え方をもちだし行動にまで至るのではないかという仮説をもっていました。その後、ゼミでの議論を経て、楊さんの問題の中心は「男尊女卑」の根強い差別意識だということが明らかになり、出身地の中国を対象に調査することに決めました。

中国社会のジェンダー関係に関する私のイメージは、中華人民共和国の国是としては社会進出の男女平等化をめざしてきており、女性の就労に関しても日本よりずっと常識となっているというものでした（実際、中国の女性就労率は現在も高い、ただし近年減少しているとのこと（片山ゆき女, 2021, 「女性の労働参加を更に促進, シニアの労働参加は次なる課題（中国）」『基礎研レポート』。

[https://www.nli-research.co.jp/files/topics/67335\\_ext\\_18\\_0.pdf?site=nli](https://www.nli-research.co.jp/files/topics/67335_ext_18_0.pdf?site=nli)）。しかし楊さんによれば、現在の中国でも、男性が外で稼ぎ女性は家を守るという意識が連綿と維持されているということです。

そうした差別意識を揺るがすための方法のとして、楊さんはこの差別意識がいかに男性にもネガティブな影響を与えているか、それを指摘する必要があると考えました。自らにとっても本当に問題をもたらすものだという認識があつて初めて、男性も差別意識を変えていくはずだからです。

楊さんは、進級論文・卒業論文の両方で、中国出身男性を対象にインタビュー調査を行いました。卒論での3名へのインタビュー結果を読んでまず印象的なことは、楊さんが、相手の背景や考えに合わせて質問し、仕事や家庭での分業の仕方についてのその人の考え方やそれがどこから生まれたかなどを率直に聞き出していることです。たとえ相手が自分とは違うジェンダー意識をもっていたとしてもそのことを責めるのではなく、別の意識の可能性を挙げながら相手の現状や今の想いを引き出しています。

そして、インタビューの結果から、楊さんは、男性のもつジェンダー意識の中に、矛盾と曖昧さがあることを見出しました。3名それぞれに見られる意識にははっきりとした違いがあり、非常に興味深い結果となっています。また共通するものとしては、男性優位の現状を維持したいし社会規範としてもそれにしたがわざるをえないといった意識と、将来または自分の個人的な関係においては、男女ともに負担のかからない生き方が理想であるといった意識とが混在しています。そしてこうした混在に当事者が自覚的でないようすから、楊さんは、中国の男性は、差別意識が自らに不利益をもたらすかもしれない可能性をそもそもよく考えたことがないのではないか、このことを議論できる環境が中国では必要と結論づけました。

中国の「男性学」に関する文献が見つけれず、研究の進め方に悩んだ時期もありましたが、着実に調査・分析を実施し、説得力のある結論に至りました。これからも楊さんには、人と話し合う力を活かし、自分がめざす社会を作っていってほしいと思います。

## 留学生や外国人がどのようにすれば日本の社会で働けるのか

劉 日華

劉日華さんは、日本でのアルバイトで自分の感覚では謝る必要がない場面で客に謝罪を求められ、違和感をもった経験をしていました。そこで進級論文では、日本で働いている元留学生に話を聞き、ことばや文化の壁は実際に働きながら少しずつ乗り越えていくことが大切だとまとめました。とはいえ、日本で働くにあたっては、ビジネス日本語やマナーを知っておくことも大切だと考え、卒論では、外国人のために書かれた関連教材5冊の考察に取り組みました。

5つの教材は方針がかなり異なっており、内容も形式もそれぞれ特徴的です。劉さんは一つ一つの教材を丹念にかつ楽しみながら読み進め、各教材の特徴を表すのにもっとも典型的な章や項目を選んで例示しました。この結果から私が知ったことは、近年の、外国人のためのビジネス教材の中には一昔前とはかなり趣を変えたものもある、ということです。

劉さんの挙げた例を読む限り、5つの教材のうち、『留学生・日本で働く人のためのビジネスマナーとルール』『異文化トラブル解決のヒント—日本人も外国人もケース学習で学ぼう、ビジネスコミュニケーション』の二つは、両方とも職場で外国人が異質に感じるかもしれない場面を具体的に取り上げています。そして、前者は理解できないことは周りの日本人に理由を聞いてみるのが大切だと述べ、後者は登場人物それぞれの心情を想像させた上で解決策について議論させるという課題を設けています。どちらも、ある決まったパターンに一方的に同調させようとはしておらず、自分自身が周囲に尋ねていくという交渉、自分自身が納得する解決策の模索といった、外国人側の行動・選択を勧めているという特徴をもちます。他方、ほかの三つの教材は、ビジネスにかかわるマナーや表現の見本を示し、それを教えようという傾向をもつようです。

劉さんが他の留学生、そして日本人にも有意義なものとして紹介した教材は、先の二つの教材でした。ビジネス日本語・マナーを知りたいという希望をもっていた劉さんのお勧めとしては意外な気もします。しかし論文を最後まで読み通してみると、劉さんは、一定の知識をもっていることは有効だとしながらも、相手のことを思い、また相手はどのように思っているのか想像してコミュニケーションを続ける中で、日本の社会や職場で少しずつ、自分にとって「程よい」関係が築けたらよいと主張しています。「程よい」というのが、論文の趣旨だけでなく劉さん自身の人柄や価値観を表しているようです。教材で提示された知識をむやみに信じることなく、目の前の他者の考えを想像してみようとする、そのうえで他者に働きかけていきながら、自分にとって心地よい地点を見出していく。劉さんは日本での留学生生活をまさにそのように進めてきたのではないのでしょうか。

卒業後は日本を離れるとのことですが、劉さんならどこに行っても何とかやっていけるだろうと思います。そのことを自分でも確かめなおした論文になったのではないのでしょうか。

## 中国の中等教育機関における日本語教育の現状

### —口頭表現能力の重視に対する日本語学習者の要望と現実—

梁 宇軒

梁宇軒さんは、中国江蘇省において、日本語教師へのインタビュー調査と高校生へのアンケート調査を実施しました。宇軒さんはコロナ禍の影響で、3年生の春以降、一度も日本にいられていないのですが、その状況を逆手にとり中国の実家近辺で調査を進めました。その結果、中国の高校の日本語教育は文法・語彙の暗記を重視している一方、高校生は口頭でのコミュニケーション能力の向上を願っているというギャップが明らかになりました。

宇軒さんには、高校生の時、日本語を熱心に学んだにもかかわらず、日本に留学した当初、うまくやりとりできず気まずい思いをしたという経験がありました。日本語学校の職員に敬語の使い方を注意されてしまったり、ファーストフード店で「テイクアウト」の意味がわからず店員から教えられて初めてわかったといったことがあったそうです。

こうした自分の経験があって、高校の日本語教育の実態や学習者の希望を調べたいと考え、江蘇省にて、二人の教師に話を聞いたほか、3つの高校と1つの日本語専修学校の高校生323名にアンケートも実施しました。日本語教師に共通していたのは、留学や大学入学のためには文法・語彙教育が中心になるのはやむをえないという声でした。しかしアンケートの結果から、高校生は、話してやりとりする能力が重要だが、そうした能力が自分には足りない、だから伸ばしたいのだけれど、授業内外いずれでも日本語で話す機会が少ないと考えていることがわかりました。

学習者のニーズと教育内容とが乖離している実態が確認できたということであり、こうしたニーズを満たすためのもっともシンプルな方法は、高校の日本語教育の内容を口頭表現重視に変えるということになるでしょう。けれども学習者に強いニーズがありながらも、教育の場がそれに応じてこなかったのだとしたら、そこには何か理由があるはずです。宇軒さんはこの問題を、今後、中国の教育政策や中等教育機関および教員の方針から探ろうとしており、研究の続きが待たれます。

今回のアンケートでは、日本語学習で伸ばしたい能力を質問しましたが、能力に加え「大学の日本の入学試験で高得点を取りたい」「日本留学試験で高得点を取りたい」といった項目を入れ、優先順位をつけてもらったらどうなっていたでしょうか。これらへのニーズも相当に高いとすれば、中国の日本語教育の方針と学習者のニーズにギャップはなく、さらに口頭表現を伸ばしたいというニーズに応えることは難しいのかもしれませんが。

試験で高得点を取ることも口頭で問題なくやりとりできることも、いずれも同じぐらい、短期的で実利的な目標のように思います。人はなぜことばを学びなぜことばを教えるのでしょうか。宇軒さんイは、中国政府の思惑を十分に把握すると同時に、それを越えて、学習者の新たなニーズを掘り起こすような研究に挑戦してほしいと願っています。

## 外国人が日本で満足できる生活を送るためには—マヤンクさんを事例に—

鷲 佳菜子

鷲佳菜子さんの論文は、日本で生活する一人のインド出身者、マヤンクさんを対象に、人が移動する先で快適に生きていくための要件とは何かを探り出したものです。鷲さんの最初の関心はことばを使わなくとも海外旅行などを楽しみたいというものであり、進級論文では日本で暮らす外国人から何かヒントを得ようと、二人にインタビューを行いました。そこでは意外なほど苦労話は出ず、日本語も生活する中で自然に覚えたという声が聞かれました。

人が異なる地に移動し心地よく暮らそうとする場合、現地で使われることばの習得が重要であることは、鷲さんが挙げている過去の調査結果からも明らかでしょう。一方で、日本では日本語学習の機会が外国人にとって権利として保障されていないため、学べる環境や学ぼうとする意志がなければ習得は困難です。さらにいえば、日本語を習得しさえすれば、日本での生活が自らにとって満足できるものとなるとも限りません。

鷲さんの今回の研究が画期的なのは、マヤンクさんの日本での暮らしを可能にしている要素を多角的に仮定し検証したことです。鷲さんの考察結果を私のことばでまとめなおすと、マヤンクさんはインドにおいて地理的・階層的条件に恵まれ、文化資本（英語能力など）を蓄えていました。そして日本に来てからは、親が形成していた生活基盤、イベント参加等のできた社会関係資本（人的ネットワーク）により、さらなる文化資本（日本語能力など）の蓄積が可能になり、そのことが正規労働者としての就職、つまり日本での社会階層の安定をもたらしたと言えます。ただし鷲さんの分析によれば、マヤンクさんのこうした達成の経路は、もともとの地理的・階層的優位性のみ由来しているのではなく、資本を活用しさらに伸ばしていくためのマヤンクさん個人としての積極的な取り組みや、それを支える価値観と広い意味での能力があったということです。

社会階層上の要件と個人のもつ意志・能力・価値観といった要件。その影響力の強弱を断言することはできませんが、この論文からは、人が暮らしを作っていくためにはいずれもが必要で、かつそれらが相互に関係しあっていることがうかがえます。私の専門の日本語教育でインタビュー調査が行われる場合、個人がどのように考え行動してきたのかに焦点が当てられ、その人がどのような社会背景とともにあったのかは見過ごされがちです。しかしそうした焦点の限定の仕方は、成功した場合だけでなく失敗した場合にも、その責任を個人の考え方や経験に帰してしまうように思います。

鷲さんは、マヤンクさんの意志と努力のありようが、他の外国人にも日本でその人らしく生きていくことの後押しになることを願って、この論文を終えました。確かにマヤンクさんのように意志をもち努力できる人もいれば、どうしてもそれが難しい人もいるかもしれませんが。マヤンクさんのことばと先行調査から、ひとつひとつの仮説を粘り強く検証してきた鷲さん。卒業後の進路では、努力できない状況に置かれている人の声を聞き、その状況を解きほぐすような解決策の提案が可能だと思います。活躍を期待しています。